

みやこものがたり
美夜古物語

おりたつ田子にもあらず。手つからなるこ
引としもなく。秋田かりほすに。家もにぎ
はしく。思ふこともなくすめるゐな人あり。
都もまさにとをからで。近き江になん住ける。
ある時都より。ゆかり有人来て。四方の物語す
なるつゝに。かゝるかた山里には。いかでかものし
給ふ。わがふる里も見給へかし。祇園清水の詣
人。四条河原の物まね。よろづ。とりたてかたるに
心うつらぬにしもあらねど。又思ふは。いかでかさばかり

の事もあらん。我国にまさらんや。山は比叡。三
上鏡山。伊吹嵩。野路篠原。長沢池。不知哉川。水
茎の岡。滋賀浦。いづれかうたにもよまざり。あなこ
とくしといひて過しが。げにひなの住居に
うづくもれ。都みざらんもむげなりと。ふとおもひ
出て。明暦ふたとせ。初卯月のすゑつかた。駒
に尻かけて行に。道すがらの山桜も。青葉まじ
りなり。名にしおふ所々たとりきつゝ。馬の
あしとうもせでゆけば。きのふ出けふと暮し
て。あくる午満ばかりに。ながれてはやき賀茂

川のはしわたりぬ。しるべ有かたにつきしに。主
もうけして。めづらしきのぼりなりとかしづく。
かれいひなどくひて。こしかたの事かたるに。今
ぞ。たびながら。たひならざる心ちす。扱都には。
いか成事か侍る。所からといひ。月日のすぐるや。お
ぼえ給ふといへば。あるじうちわらひて。しらで
すぐる人も有げに候。やつかれなど。朝夕の
いとなみに。さまかへて。おぼえぬ事も候

又みやことて。いかでめづらしき事のみにも侍
らん。ちかきころになん。津の国より。女のまねや
うする男来りて。平野にてかぶきせしに。
法のつよきにまけて。又みやこをばまかて侍る。
さては。つゝじさつきの。ことやうなるに。あまた名
づけてもてはやすなるうちに。おかしきも
あまた有げに候。所せけ成に。おほくはあらねど。
すこしはもたり。み給へとて。つまどあくるに。げに
めづらか成花のさまなる中に。しろき。あかき。む
らさき。かさなりたるも。ひとへなるも。壺もとの

木にさきわかりたるなん。おかしとみゆ。前に
さぐれ水ながれて。たていしなどの躰。又おか
し。かたはらには。いろ／＼のくさ花をうへ。こころ有
さまの住居と。みなか人はうらやむべし。あすより
なん。きた山にし山みんとおもふに。雨もそを
ぶりずぎもあしたゆしとつぶやくに。ひとひ二
日過してぞ出立。あづまぢのせきはほどとを
ければ忍ぶにたらず。長家のぬしのせきにも。
かくや花は匂ふといひし。白川みんとて行に。
くろだにといふなる所にいたる。寺のありさま。

雨もそほふり、従者も「足たゆし」と
民部卿長家 白川院にて花をみてよめる
あづまぢの 人にとはばや し
らかわの せきにもかくや 花
はにほふと

いとたうとしとみゆる物から。うしろにあた
つて。こと。さみせんの音聞ゆ。いか成事にやと。
こゑをしたひもて行。塔の前をも過るに。藤
のはな。いとゑんにさきかゝりたる。いはんかたなし。
山には。まくうちまはし。男も女も物すに。きゝし
音も爰なめりとおもふ。いまはやるにや
あらん。うき世は夢じや。われはしばがきなどゝ。
しどろもなく。うたひなすに。げにゐなか人は。も
はや爰には。いられもうすまいよのとも。うた
ひて。のかまほしげなり。又かたはらのまくには。

尺八などの音も聞えて。ひいなのおほい成物に。
きものきせてまはす有。つたへて聞し。四糸
河原も爰ぞとおもひて。かたえの人にとへば。
さにはあらず。おやまにんぎやうとて。都にはや
るをもてありく也。しらざる人も有けりとわらふ
に。此人共のこゝろ。をしはかれて過る。中山
といふ。所越て。吉田のやしろにかしこまり申。
それより白川にいたりぬ。物ふりたる所とみるに。
石きざむ音なん。あはれもさむるばかりきこゆ。
花園。長谷。岩くらなどみありくに。ほとゝぎす

も。今ぞなのるくらふ山。きぶね川。賀茂き
たのなどもめぐりありく。あたごのみねより
みれば。都のうちも。手にとるばかりなり。麓に
二尊高院といふ成寺の。あなる嵩ぞ小倉山とい
へど。又ある人のいひしは。ほさでも袖の。と。よみ給
ひしは。はるかにくだりて。大井川の。すこしこな
たぞ定家卿の。家ゐし給ひしところとも云。
あらし山などみありきてかへる。あくればひが
し山におもひたつに。いまぞまことの四糸

河原にもきぬ。からびたるこゑ共して。左内が松

連飛び蜘蛛舞||軽業

かぜ。とらやがお山。宮内が佐々木。吉郎兵衛が女がた。
れんとびくもまひ。などゝ聞わくべくもあら
ずぞ。いひあらそふ。うちとゞろかすたいこ。つゞみ
の音。なるかみよりも。おどろくしうきこゆ。
過て祇園の屋しろにまいるに。わかき女の。
すぐ成あみがさきて。ざらめきありくに。
わかき男どもは。つきめぐりて。いろくんと評
ばんす

七

くんじゅ||群集

つねならぬものなどゝいふに。心えかたくて。あ
たりの人にとへば。都には忍びて。をく女共あまた
あり。ぞくに手かけども云。それにまぎれて。
町屋にかくれ居。遊女どものありくにかく
なんいふと語に。今ぞ心えつ。そのみならず。
男女くんじゅして。道もさりあへぬに。花の折
ふし。おもひやらる。清水のかたへと心さして
ゆくに。円山。さうりんじ。りやうぜんのかたに
は。うたひこつたのこゑすさまじきばかりき
こゆ。ちや屋ごとの女どもは。ただあづまのかたへ旅

だちたる心ちぞする。千手堂のありさま。又
さらなり。瀧のしらいと。手にむすぶに。心はとくる
さまなり。堂より左のかたの坊に。人こぞりて
けんぶつす。何事にやとたちよりてみるに。
むかし。げんしんといへる沙門の。行惠居士に逢
て。坂上の田村丸のこんりうし給ひし。初より
の事かけるえんぎなり。うれしき折にもあ
るかなとよりてきくに。まことにしゆしやうの
事共なり。絵は。土佐の光信。手は其ころの公卿
六人して書給へりと語。それより鳥べ山。大仏

八

豊国などみありきて帰。日をへて主に
いふ。げに都のさま。きしにもこえ。わがくにな
どゝ日をおなじうしても。いはれじとおもふ物か
ら。つねになりよりかはりたる事もなし。是
よりまさる事もあらじ。今は国へもまからんと
いふに主ほゝゑみて。み給ふ所。まだ三が一にも
あらぬうちに。ことさらぬなかをよばぬところ。ひ
とつ有といふいづこならんといへばされば是
より。ひつじさるにあたつて。うかれめのすむ
なる里有。名づけて島原と云。心とむとはあ

六

らで。み給はぬかといへば／＼げにさる所。有ときゝしながら。今迄おもひよらざりし事よ。されど。われゐなかにすみなれて。うちいでん。こはつきもおかしきさまにて。いかでさやうのかたに。まじらはん。其みちのことも。たどりきゝて社といへば／＼主云。何か。さまでふかき事の侍らん。ことさら今の世は。人の心かしくやなりけん。をろかにやなりけん。かやうの事まで。をしへの文世にひろまり候。難波物がたり。島原集。ね物語とて。さまぐゝの事かける物有。つれぐゝのなぐ

さみにもとて。そこらしりたるかたに有を取よせてみするに／＼まことにおかしき書にも侍るかな。かくやましますといへば／＼主うち笑ひて。われいかでそのぜんあくをしり侍らん。島原集には。いにしへいまのことをひきて。難をこふに。いまゝで難島原集とも。難ね物語とも。云なる物出たるともきかねば。さだめてよきにぞ侍らん／＼客又問。此物語ども。いかなる心えにか作。此みちのことをしへんためにや侍。又はいましめて作物にや侍と云／＼答云。それも又しらす。

ず。此ころ大坂にぞ。十とせ余。八とせばかりのしゆぎやうとて。けいせい道のこと。われひとりしたりがほに。まさりぐさと云物をつくるを。そと。みしに。いけんばかりはきゝごとにて。さしておもしろきとおもふしも見えず。けいせいのよしあし。定紋などをしりたるとて。すいともいはれじ。をしへのためにかゝば。座敷の躰。はりあひの。いきごみ。くぜつのしな。あいさつのことばなどかきてこそ。をしへにもならぬ。我むかし雨のうち。徒然のあまり。ふと島原へゆきしに。はなす女は。ひま入

て。宵の間かたりしばかりにかへる。とのじせし宿に。そのころ上手のきこえ有太夫。二人居しが。とふらひきて世の中の物かたりすなるうちに。初会のおとこに逢そめてより。しみでのち。くぜつ心中のだん／＼迄。ふたりして女男にかはりてかたりきかせしぞ。まことにをしへにもなるべく。おもしろかりしこと。いまにわすれぞ。彼大坂の者も。ふしんあらばたずねてきけとかきしかど。所をもしらず。名をあらはさねば。とひゆく人も

あらじ。ことさらでんきのうちに 禁裏仙洞の

事をかける。これ何事ぞや。かやうのいやしき
けいせいふぜいに。たいして云事かは。たゞし。せん
れいもありや。もし異国などの事ならば。しばしは
ゆるさんか。さだめて 禁裏仙洞の事。よくあない
しりたる人には有べけれど。王土にすみながら。かや
うのこといはん人。ふかくなりとも。をろか也とも。取
あげていはんにはりあひなし。惣じてけいせい
のよしあしもいらざる事也。よきばかりえり
とりてはなさば。あしきはすくらんとおもへど。
さもみえず。あしきといはるゝ女を。はなす人を

見るに。おなしごとくに。おもしろきとみえたり。
しかるときは。あしきもあしきにたゞざるべし。
そのうへ。おほき女どもの事をのみ。ひとりして
其あちはひしらるゝ物にあらず。おほくはすい
りやう。又は人にたづねてぞかゝんずらめ。其たづ
ねられし男。はなす内ならばよくいふべし。かれ
たるおとこにたづねば。よくてかるゝはまれなれば。
なき事もつけて。あしくぞいはんずらめ。人だ
のめにかくは。まこと成こと。すくなかるべし。たゞ何も
しらぬものゝかけるさうしとおもふに。此ころ大坂

よりのぼれる人の。かたるをきけば。此さくしや。新
まちへゆきしに。さる上らうにとらへられて。ま
さりぐさに出し事共。とがめられしに。一言の答
にをよばず。しりをかゝへてにげしといひしぞ。
さぞとおもはれて。おかしかりき。又難波物語。
島原集。ね物かたりとても。よきとはおもはず。
のたまふやうに。をしへのためにいはゞ。不可也
此みちに立入ほどの水のごゑ。これほどのことは
りは。すいりやうにもしりつらん。いまいふ事共
も。みなけいせいの口よりやもれつらん。古きを捨

手たてをかへてつもらんに。まよへる身の月の
ごゑ。いかでかそれをさとらん。此物がたりを手本
ばかりにて。すいだての心してゆかば。かへりてあざ
けりをうくべし。又いましめのためぞならば。これ
も又不可也。此道に落入もの。おやのいけんにもし
たがはず。友のいさめもきゝいれず。かんだうをも苦
にせずしてゆくもの。いかで此物語にがてんして。
ゆくことをやめん。中にも難波物語には。変の

たとへを引。ね物がたりには。恋の別といふことを書。これことさらまよひの元也。いかにと云に。千人万人が

内に。壱人といへども。千万が内の壱人は。われなりとおもふもの有べし。又その内へ。我やいらんとたのむもの有べし。たゞいましめば。壱人をもゆるすべからず。客云。扱はをのがくちなぐさむばかりに。いふにぞ有らん。しからば何のあたありてか。けいせいのことあしくはいひなすや。答云。けいせいといふもの。いつはりかざりて。人をだまし。或はよこぎらせ。てください。かるがゆへに。をのが身にかゝらぬ事も。にくみていふとみえたり。それをにくむもをろかなり。男とても。けいせいをぬらさぬにはあらず。

ましてながれの女の。すぐにては身をたてんに所あらず。なぐさみとばかりおもひてゆかば。せくこともなく。にくむこともあらずを。しみてのちは。わがものゝやうにおもふ。これをろかなる心と思ふに。わがごとくいひしものも。此みちにおちいれば。右いひしことばをわするゝとみえたり。こゝに二色有。けいせいのしなくきゝしばかりにて。ゆくものを。をろかなりとてわらふもの。しりそめてはわらはれし人よりも。まよふもの有。又心底はまよひゐて。まよはぬかほに。けいせいのあしき事ども

いひ立て。そしるものあり。とかくわきよりをしはかるにをよばぬみち成べし。客又問。右。の給ふにてくだよこなどゝ言事有。さやうのこと。しらではもつともなり。しりたる男の。いかでかそれをせかざるや。答云。それまたをよぶべからず。もつともすいなる男は。我居中は。てくだをもさせじ。外のちいんにもあはせじ。けふの男は。何時くるといふことをしつて。それよりまへにほかの男をよびよせ。出口にきやうしやをつけをきて。あふに。なにのはゞかりか有べし。てくだは。大かたくるわのうち

の事なれば。まして心安し。おほくゆくものは。とくうちにそんなあり。おほくゆかざるものは。そのうちにとく有と。おもはんにはしかじ。客また云のたまふ事共をきけば。われもすこしはすいになりし。心ちこそすれ。とかくけいせいといふもの。つめたくして。こなたの事おもはんに至極せり。答云。いかでさうばかりにもあらん。あるひはおほくは

なして。重宝成ちいん有べし。あるひは数はかは
ねど。物をとらせ。身あがりなどをうけとり
て。てうほうなるあるべし

あるひははなすに。おもろき男とおもふち
いん有べし。或は年月なれて。おもふともなく。
たゞ心やすきちいん有べし。あるひは年あき
て迄のこと。やくそくして。すゑをたのむちいん
有べし。これらのおとこ。いかでかちさうをせざるべ
き。もつともをろかにおもはじ。しかるといへど。そ
れをたのむおとこ。又をろかになり。けふまではさ
もあらん。あすまたまざるちいんつかんに。おもひ
かへまじきものにあらず。その心底をしらんと。せい
しをかゝせては。人にもすしんぢうをさすれば。

又おなじ。とかくけいせいといふもの時々の
気々にして。しれざるものとおもはんぞ。至極な
らん。客云。のたまふごとくなれば。すいりやうに
もをよばず。たゞなれではしりがたからん。其有
さまもまづ見てこそ。いざゝせ給へとて。あるじ
もろともつれて。みちすがらかたりくゆけば。
日もはやたそかれどきなり。大みやをさがり
て。丹波ぐちといふなる所へ出てみれば。のり物
どもたてならべて。おもはず成所有。客主に
問。われ一とせ江戸にて。下場と云所をみしに。かばか

り乗物の所せけまで。たてつゞけたり。それ
には人もおほかりし。爰もさやうのかたにやといへば
主答。さにはあらず。むかひにみえしぞ。くだんの所
なれ。それへゆきし人どもの。むかへにもものしゝ者
どもなり。是よりさきへはゆるさざるにより。爰
にてまつと語。客きゝて。まことに都とてひ
ろき事にも侍るかな。かく乗物にて。ゆきゝす
る富人共の。供のものとてもなく。のり物もさま
あしけれといへば。主もつともふしんなり。
きせんにかきらず。やどのしゆびなき者がち

なれば。少もとゞこほりなきやうに。乗物にて
いそぎ。みちのつゐへを。さきにてのたよりにす。
又しゆびにかまはね共。道とをきにより。あるひは
人に逢じがため。あるひはせの字などにのる者
おほければ。かくこしらへをきて。則。になふもの共の
借なりとかたりもてゆくに。門より入てみれば。

あたまそりさげたるとしよれるおとこの。何事にやあらん。よぼふあり。いかなることにやとへば。門さすと云事を。帰れる客にしらすなりと答に。扱は其人どもの。かへらんうかれすがたぞ。おも

しろからん。とてもこよいはどの字なれば。いざ爰にやすらひ見んと。ちや屋にこしかけ。あるに。みゝにもいらぬ事共をぞ。つぶやきてとをる。▲としのころ。三八ばかりの男。二三人つれてくる。ひとりの云。親兄弟のめをしのびてくるに。心ぐるしき事のみにて。なぐさみといへど。なぐさみにもならねば。やめんとおもへど。こればかりとおもひてくるに。又。え。おもひすてず。これより後。いつやむべきともおもはず。そこには。いかゞおもひ給ふといへば

／＼今一人の云。われもさおもふときもあれど。けふの有さま見給へ。いかでかおもひきられんや。あすしらぬ身とのみおもひて。たびをかさぬ。我長崎。大坂。江戸にて。此みちにたすさはりて見るに。都に増こと社なけれ。長崎は物和かにして。さながら宿の女房の如し。大坂はそれよりまさるといへど。ぬらしよくうけて。はりたらず。江戸はもつとも初会にははり有やうなれど。なれて後。おもひをとれり。たゞはじめをはりのけぢめなくよきころなるは。爰なりといへば。／＼今壱人

の云。長崎の事はみねばしらず。江戸大坂。都とても人にはよるべけれど。それ／＼に逢せんに。いかでか京にをよばん。かゝる所へ生れあひたるこそさいはいなれ。きのつまることな。かたり給ひそとてぞ過る▲つぎに。四十はかり。三十あまりのおとこ。ふたりつれてとをる。／＼四十ばかりなるおとこの云われ六条に有し時よりしり初て。今にみること時々なるに。れん／＼けいせい風俗社。あしくなりもてゆけ。つしま。よし野などいひし者どもよりは。三笠。野かぜなどはをとり。其ころよ

りは又あしくぞなりし。すへ／＼いかゞあらんといへば。／＼今一人の云。それもけいせいのふうばかりあしきにあらず。むかしよりいまの世のにぎはひをとりたるともおもはず。たゞそのとき／＼のおとこにまかす心なるべし。左門初音などは。むか

しのふう共しるべけれ共。年よりしとて人
用ひねば。ちからをよばず。おてまへなど。爰へたち
いらんとしも。今すこしぞこゝろえたまへとて
そ過る▲次に二十あまりの男。三人つれてとをる
／＼ひとりの云。けふのしやこそあしかりつれ。もら

へどくれず。こころにもいらぬものとはなし
のみならず。くぜつはきゝつ。さたのかぎりといへば
／＼いまひとりの云。われも御手まへたちのため。随分
いはじとおもひつれど。いひかゝりてせんかたもなく
て。されどつゐでながらよきなりといへば／＼いま
ひとりの云。だたいそちがゞ。むりじや。さきのあい
て。まだしよしんなればこそ。こうしやならば。
中々そちがいふまゝには成まじ。又しんぢうなど
といふものも。そこへつまりては。せいといひたるは
よし。すゑとげてはなさんとおもふ女に。さする

物にはあらず。たとへさすればとて。けふの躰こ
そあはたゝしかりしと。かたりてぞ過る

▲次に十八九ばかりなる。わかき男。たゞ一人。いそかはし
げにてくるに。乗物のものと思しき男。出合し
に問。おやぢは。なんときかへられた。たづねられた
かといへば。男答。八ツ時分に御かへりなされま
して。御たづねなされましたにより。たれ／＼さま
御同心にて。矢数見物に御こしのよし申まし
た。三九郎を。大仏へやうすきゝにつかはし。稲
葉堂にてまち申はづにいたし候といへば。よし

矢数〓通し矢 三十三間堂
稲葉堂〓平等院

／＼。乗物いそけとて。あとをみずにはしる。
門もさせば。あげや町へとゆくに。をくりて出し女
共のさま。四条にてみし。にんぎやうによくお
ぼえたり。さてあげやにいたるに。ていしゆ出合て。
主に云。扱々久しうで御出なされました。よくぞ
みちも御おぼえして。あまりさやうに御心つめ
られましそといへば。／＼さればよ。としよりぬれば。
よろづはゞかりおほくて。おもひながらくる事
もなし。されどけふは。めづらかなる。あなか人の案
内のため。つゐでながら心のばさんとてぞこし。上

らう衆よびてあそばん。どれか。かれかといふに
名あるはみなやどにゐず。よしやこよひは。小歌
なりと聞。さゝうちのみてあそばんとて。上手と聞
しを。ひとりふたりよびぬ。初会といひ何の興

もなくてあかしつ。あくれば物日とて。つねよりも人しげし。こぞりし人のきたをぞみる。何ことやらんと。みせにすだれかけわたしてみるに

わちがひのうちのに。きりのとう。わりびし。からはな。きゝやうのもの。きつかうのうちに。ききやうまつかはびしのうちに十もんじ。いろくさまぐものもんつけたる。きものきたる人どももの。かぜふかば。玉ぞみだれぬべき青柳のさまして。通り給ふ

すがた。いにしへの美人にたとへんとすれば。みぬ事なれば。これにはまさらじとぞおもふ。はなにたとへんとすれば。けおされぬべきも。はなの恥辱と。さすがえいはず。たゞ我玉は。いづちか行けん。心もうちやうてんに成におもふは。いやくかゝる

ところに長居して。此人くうかされなば。わが国へ帰らん道。丹波のかたへたどらんうたがひなし。難波物がたりにかける。しらぬさきにやめよといへること。こゝ成べしと。千度心はとまりぬれど。おもひきりつゝかへらんとせしが。せめて其名ばかり成とも。かきとめつゝ。国にての物語にもと。しるしれける物ならし

上み町にて長崎屋内

天じんつしま よしの ていか いくた

八しほ しまの助 花月 きゝやう

かこい つまぎ 大かく まんこ せんよ

太郎右衛門内

大夫ふぢえん年二十二紋きゝやう 天じんこふじ なるせ いさこ まつ山

かこい げんば くない なには 初しま 高嶋

八左衛門内

大夫左門とし三十三もんふじの丸 二かさとし十八もんまつかはびしの内二十もんじ 玉川とし十五紋未定

天神八はし きんさく 野かぜ きゝやう

かこいしげ 花鳥 あらし しぶや

まさつね もろこし よつの つねよ 初かせ

五左衛門内

かこいはつよ やしま

喜左衛門内

大夫はつねとし三十文かたばみ 薰年十九文きつかうの内ニきゝやう

金太夫とし十八もんわりびし 小太夫年十六文かしは

千殊とし十五文きゝやう 天じんはつ嶋 玉かづら たかお

かこいゑつちう いつき とやま くらうず

みまさか とのも たかね 初はな

中之町にて伏見屋九郎兵衛内

天じんせきしう かこい玉かつら

喜三郎内

天じんごや きちやう かこい 玉かせ かしは木

七郎兵衛内

太夫かつ山とし十七文いれこびし 天じんあはぢ かせん かこいはつせ

西洞院にて三郎兵衛内

天じんいつみ かしは木 さまの助 はつね

かこいしな さごろも くららの助

中どうじにて次郎兵衛内

かこいふじの ちくざん 兵左衛門内 かこいにぎへもん

下之み町にて四郎左衛門内

天じん初嶋 かこい玉がき 村雨 嶋之助 むへもん

藤右衛門内

天神くも井 おきつ たつなみ おくい

かこいさかの ちとせ 越中 ふしと るい

又十郎内

太夫小藤とし三十もんから花 きん山とし十七もん松かはびし ふじなみとし十五もんいまださだまらず

天じんつまぎ いづも かつら いくの きんこ

かこいかしま せんこ あはぢ すま

みかげ せいしゆ 花山 よし川

あげや町にて三四郎内

太夫やちよ年二十三もん花わちがいの内ニきり めいしゆ年十九文まりはさみの内桐 天じんよし高

天じんもしほ うすぐも こきん かこいからさき

もなか きんさく のざは たかお

こよし ちよに 嶋之助 やまと では

あげやの次第

西かは北

すみや四郎兵衛 ますや与三左衛門 あふぎや七左衛門 次郎右衛門

喜右衛門 左平次 伊兵衛 次兵衛 善右衛門

伝三郎 左兵衛 東がわ南が又右衛門 新兵衛 半右衛門 長九郎 甚助 清太夫

かぎや利右衛門 らうそくや久左衛門 仁左衛門 新右衛門 六右衛門 市右衛門 五郎左衛門

清兵衛 甚右衛門 終